

「聲（）人」表記の記号論的解釈と万人訓読解の整合性

— 帛書老子における語間空白の思想的機能 —

エコツーラボ合同会社

猪澤也寸志

polyp@webman.jp

(2026年2月7日現地時間JST)

要旨

本論は、馬王堆帛書『老子』に頻出する特異表記「聲（）人」を、従来の「聖人」への通仮字処理から切り離し、記号論的・構文論的観点から再解釈するものである。帛書における表記分布、語間空白の物理的存在、文中での機能的位置、ならびに思想内容との整合性を総合的に検証した結果、「聲（）人」は特定人格や超越的主体を指示する語ではなく、発話開始を示す記号的装置として機能しており、その直後に続く内容は原理的に「万人訓」として構成されていることを論証する。これにより、老子テキストを「聖人訓」あるいは「統治論」とみなす従来の枠組みは再検討を迫られる。

1. 問題の所在：通仮字仮説の限界

帛書老子の研究史において、「聲（）人」は長らく「聖人」の異体・通仮字として処理されてきた。これは、伝世本（とりわけ王弼本）を事実上の定本とし、帛書をその異同資料として従属的に扱う研究姿勢に基づくものである。

しかし、この通仮字仮説は以下の点で根本的な問題を孕む。

- 同一写本内での体系的書き分けという事実を説明できない
- 「聲」と「人」の間に存在する安定した語間空白を説明不能
- 文脈上、統治主体や聖人像を前提としない内容との齟齬
- 「聖人」表記が限定的にのみ出現する理由を説明できない

これらは単なる解釈差ではなく、仮説の前提そのものの不整合を示す。

2. 文献学的基礎事実：表記分布の非対称性

2.1 出現頻度と章分布

帛書老子における両表記の分布は明確である。

- ・ 「聲（）人」：道編・徳編を通じて20章以上
- ・ 「聖人」：第71・78・79章のみに限定的に出現

この非対称性は、偶発的誤写や書記の揺れでは説明できない。むしろ、思想的・機能的意図を伴う書き分けと理解する方が合理的である。

2.2 「聖人」表記の限定使用

「聖人」が出現する章はいずれも、

- ・ 契約
- ・ 責任
- ・ 政治的対処
- ・ 公的秩序

といった、社会制度・政治言語が前景化する文脈に限定されている。

この事実は、「聲（）人」との機能的差異を示唆する。

3. 語間空白の物理性とその意味

3.1 空白は誤写ではない

「聲」と「人」の間の空白は、

- 文字欠落の痕跡（脱筆・滲み）ではなく
- 安定した間隔を持つ物理的余白

として確認できる。これは帛書の他箇所に見られる誤写・異体とは性質を異にする。

3.2 空白の機能仮説

本論では、この空白を

「意味の欠落」ではなく
「意味を排除するための記号」

として理解する。

すなわち、ここには本来、

- 身分
- 資格
- 属性（聖・賢・君など）

が入り得たが、それを意図的に書かないことで、

「無資格・無属性の〈人〉」を成立させている。

4. 構文論的検討：「聲（）人」の文中機能

4.1 主語名詞句ではない

「聲（）人」は、通常の名詞句（主語）としての振る舞いを示さない。

- 修飾語を取らない
- 叙述の主体として展開されない
- 行為主体として連続しない

むしろ、その直後に一般命題・教示文が続く。

4.2 発話標識仮説

この構造は、古典漢文における

「曰」「云」以前の発話開始標識

と同型である。

したがって、「聲（）人」は

「声して曰く——人は...」

という発話導入を、人称を特定せずに使う装置と理解できる。

5. 記号論的再解釈

5.1 「聲」の再定位

「聲」はここで、聴覚的能力や神秘的感応を意味しない。

それは、

- 発声
- 語り
- 直接的呼びかけ

を示す行為記号である。

5.2 空白の思想的効果

語間空白は、

- 語り手の権威化を防ぎ
- 特定主体への帰属を拒否し
- 読者を直接的な受け手にする

という効果を持つ。

この点で、「聲（）人」は脱人格化された語りの装置である。

6. 万人訓としての整合性

6.1 内容分析

「聲（）人」直後に続く内容は、

- ・ 生活態度
- ・ 欲望の制御
- ・ 自己誇示の否定
- ・ 過剰の回避

など、誰にでも適用可能な指針である。

そこに、

- ・ 超人的能力
- ・ 修行階梯
- ・ 政治的権限

は一切要求されない。

6.2 「聖人」章との対照

「聖人」表記章では、

- ・ 受邦之詬
- ・ 執右介
- ・ 社稷・天下

といった政治語彙が顕在化する。

この対照により、

- ・ 「聲（）人」 = 万人訓・生活言語
- ・ 「聖人」 = 政治訓・制度言語

という機能分担が明確になる。

7. 思想史的含意

7.1 読者像の転換

従来の老子像

聖人が、民に教える書

本論の老子像

人が、人に直接語りかける書

この転換は、老子を

- ・ 統治思想
- ・ 選民思想
- ・ 神秘思想

から切り離す。

7.2 テキスト性格の再定義

帛書老子は、

- ・ 為政論の補助文書ではなく、
- ・ 生活実践のための原理書として再定位される。

8. 結論

以上の検証により、以下が結論づけられる。

1. 「聲（）人」は「聖人」の異体ではない
2. 語間空白は思想的に機能する記号である
3. 「聲（）人」は発話標識として機能する
4. その内容は原理的に万人訓である

したがって、帛書『老子』は本質的に、

特定者のための書ではなく、
すべての人のために開かれた書である

という理解が、文献学的・構文論的・思想的に最も整合的である。

付記

本論は、伝世本中心主義に立脚した従来解釈を否定するのではなく、
帛書原文の事実から必然的に導かれる解釈枠組みを提示するものである。

9. 章例

●第2章 (觀微)

- ・原文：是以聲 () 人居無爲之事 行不言之教
- ・訓読：ここをもって、聲「人は無為の事に居り、言わざるの教えを行なう。」
- ・現代訳：それゆえに、老子「人は、作為的な事業に安住せず、言葉に頼らない教化を行え。」

●第3章 (安民)

- ・原文：是以聲 () 人之治也 虛元心 實元腹 弱元志 強元骨
- ・訓読：ここをもって、聲「人の治むるや、その心を虚しくし、その腹を實にし、その志を弱くし、その骨を強くす。」
- ・現代訳：

それゆえに、老子は言う。「人は、自らを治めるにあたってはこうせよ——認識を固定化する心を虚ろに保ち、生命の根源たる腹に氣を満たせ。作為的な意志を弱め、根源的な生命力（骨）を強固にせよ。」

●第5章 (用中)

- ・原文：

天地不仁 以萬物爲芻狗

聲 () 人不仁 以百姓爲芻狗

・訓読：

天地は仁ならず、萬物をもって芻狗となす。

聲 「人は仁ならず、百姓をもって芻狗となす。」

・現代訳：

天地は（そもそも）仁を超えている。万物を祭祀の草狗のように（平等に）扱う。

聲 「人も仁を超えている。人々をすべて平等に扱う。つまり、同じように扱い、特別扱いも執着もしない。」

●第7章（無私）

・原文：

天長地久 天地之所以能長且久者 以亓不自生也 故能長生

是以聲 () 人芮亓身而身先 外亓身而身存

不以亓無私與 故能成亓私

・訓読：

天長く地久し。天地の能く長く且つ久しき所以の者は、その自ら生ぜざるを以てなり。故によく長生す。

ここをもって、聲「人はその身を退けて、かえって身先んじ、その身を外にして、かえって身存す。」

その無私なるを以て与うるに非ざれば、故によくその私を成す。

・現代訳：

天地は長く久しい。

天地が長く久しくありえるのは、自分自身を生かそうとしないからだ。

だからこそ長く生き永らえる。

このゆえに、人は、

自分の身を後回しにすることで、かえって先頭に立ち、

自分の身を度外視することで、かえって存続す。

それは無心を持ってするからこそ、

かえって自分自身のことが成し遂げられるのだ。

●第12章（爲腹）

・原文：

五色使人目盲

（中略）

是以聲（）人之治也 爲腹不爲目

故去彼取此

・訓読：

五色は人をして目盲に使（せ）しむ。

(中略)

ここをもって、聲「人の治むるや、腹のためにして目のためとせず。」

故に彼を去りて此を取る。

・現代訳：

五色は人の目を盲にさせる。

(中略)

このゆえに、聲「人が自らを治めるとは、腹（生命の根幹）を足るものとし、目（欲望の窓）を足るものとしないことだ。」

それゆえ、あちら（目）を去り、こちら（腹）を取るのである。

●第19章（樸素）

・原文：

聲（）知棄辯 民利百倍

僞棄慮 民復孝茲

巧棄利 盜賊無有

此三言也 以爲文未足

故令之有所屬

見素抱樸 少私寡慾

絕學無憂

・訓説：

聲「知を棄て、辯を棄てよ。民の利、百倍す。」

偽を棄て、慮を棄てよ。民、孝慈に復（かえ）る。

巧を棄て、利を棄てよ。盜賊無し。

此の三言（みことば）は、以て文たる未だ足らざるが故に、

之をして属（したが）う所有らしむ。

素を見（あらわ）し、樸を抱き、私を少なくし、慾を寡（すく）なくし、

学を絶ちて憂い無し。

・現代訳：

聲「作為的な知恵と言い争いを捨てよ。そうすれば、人々の眞の恵みは百倍になる。」

作為と策謀を捨てよ。そうすれば、人々は自然な親愛の心に立ち戻る。

技巧と私利を捨てよ。そうすれば、盗みも争いも起らなくなる。

この三つの言葉だけでは十分ではない。

だから、これらの根本原理を示す。

素朴に生きよ。私心と欲望を少なくせよ。

学識を絶ち、憂いを無くせ。」

●第22章（執一）

・原文：

曲則全枉則正窪則盈敝則新少則得多則惑

是以聲（）人執一以爲天下牧

不自視故明不自見故彰不自伐故有功弗矜故能長

夫唯不爭 故莫能與之爭

古之所謂曲全者 幾語才 誠全歸之

・訓読：

曲なれば則ち全（まつと）うし、枉（ま）がれば則ち正し、窪（くぼ）めば則ち盈（み）ち、敝（やぶ）れれば則ち新しく、少なければ則ち得、多ければ則ち惑う。

ここをもって、聲「人は一を執りもって天下の牧となす。」

自ら視（み）さざる故に明るく、自ら見（あらわ）さざる故に彰（あきら）か、自ら伐（ほこ）らざる故に功有り、矜（おご）らざる故に能（よ）く長し。

それ唯だ争わざるを以ての故に、能（よ）く之と争うもの莫し。

古（いにしえ）の所謂（いわゆる）「曲なれば則ち全うす」とは、幾（ちか）きか語れる才（ことば）ぞ、誠に全うするは之に帰す。

・現代訳：

曲がっているからこそ完全となれる。歪んでいるからこそ真っ直ぐとなれる。窪んでいるからこそ満ちることができる。古びているからこそ新しくなる。少ないからこそ得られる。多いからこそ惑う。

それゆえに、聲「人は、道（一）を守れば、天下を自然に導き保つ。」

自分だけを正しいと見ないからこそ、物事の本質が明らかになる。自分だけを顕そうとしないからこそ、眞の姿が顕れる。自分を誇らないからこそ、眞の功績が残る。驕らないからこそ、長く保つことができる。

まさに一切争わないからこそ、誰も彼と争うことができないのだ。

昔から言われる『曲がって全きを保つ者』とは、単なる言説ではない。

まことに、すべてはこの理に帰着する。

了解いたしました。ご指定の現代訳を最終形として採用し、以下の通り確定いたします。

●第27章（曳明）

・原文：

善行者無轍跡

善言者無瑕適

善數者不用檮策

善閉者無關籥而不可啟也

善結者無纏約而不可解也

是以聲（）人恆善救人而無棄人

物無棄財是謂曳明

故善人善人之師

不善人善人之齎也

不貴亢師不愛亢齎

唯知乎大昧是謂眇要

・訓読：

善く行く者は轍跡（てつせき）無く、

善く言う者は瑕適（かてき）無く、

善く數（かぞ）う者は檮策（とうぢゃく）を用いず、

善く閉ざす者は關籥（かんやく）無くして而も啟（ひら）く可からず、

善く結ぶ者は縲約（ばくやく）無くして而も解く可からず。

ここをもって、聲「人は常によく人を救いて、而して人を棄つること無し。物に棄つる財（ざい）無し。是れを曳明（えいめい）と謂う。」

故に、善人は善人の師、不善人は善人の齋（し）なり。

其の師を貴ばず、其の齋を愛さず。

唯だ大昧（たいめい）を知るを、是れを眇要（びょうよう）と謂う。

・現代訳：

よく行う者は、轍跡を残さない。

よく言う者は、欠点や非難されるところがない。

よく数える者は、算木や策を用いない。

よく閉ざす者は、鍵や門を用いないが、誰にも開けられない。

よく結ぶ者は、縄や紐を用いないが、誰にも解くことができない。

それゆえ、聲「人は常に、人をよく救い、誰ひとりとして捨てる事がない。

物についても、捨てるべき材はない。

これを『明を引き出す道』という。」

ゆえに、

よき人は、よき人の師となり、

よからぬ人は、よき人の糧となる。

しかし、

師であることをことさらに尊びすぎず、

糧であることに過度に執着して愛しすぎない。

ただ、大きな迷いをそのまま知ること——

これこそが精妙なる要点である。

了解いたしました。ご提示の現代訳を承り、これで確定とさせていただきます。

●第29章（自然）

・原文：

將欲取天下而爲之 吾見元弗得已

夫天下 神器也 非可爲者也 爲者敗之 執者失之

物或行或隨 或冥或吹 或強或碰 或培或櫛

是以聲（）人去甚 去大 去楮

・訓読：

将（まさ）に天下を取（おさ）めんとして之を爲（おこな）わんとせば、吾其の得ざる已（のみ）を見る。

それ天下は神器なり。爲（な）す可き者に非ざるなり。爲す者は之を敗り、執する者は之を失う。

物あるいは行き、あるいは隨い、あるいは冥（あつ）く、あるいは吹（す）さず、あるいは強く、あるいは碰（くだ）け、あるいは培（つちか）い、あるいは櫛（おとろ）う。

ここをもって、聲「人は甚だしきを去り、大いなるを去り、楮（はなはだしき）を去る。」

・現代訳：

天下を思い通りにしようとして作為を加えようとすれば、

それが成し遂げられないことを、私は見て来た。

そもそも天下は、神妙なる器である。

人為によって扱えるものではない。

作為を加える者はこれを損ない、

固執して握ろうとする者はこれを失う。

物には、

先んじるものもあれば従うものもあり、

盛んになるものもあれば弱まるものもあり、

強いものもあれば碎けるものもあり、

栄えるものもあれば衰えるものもある。

これゆえに、聲「人は、

行き過ぎを去り、

過大を去り、

極端を去る。」

了解いたしました。ご提示の現代訳を承り、これで確定とさせていただきます。

●第34章（成大）

・原文：

道漸呵 亓可左右也 成功遂事 而弗名有也 萬物歸焉而弗爲主 則恆無欲也 可名於小 萬物歸焉而弗爲主 可名於大 是以聲（）人之能成大也 以亓不爲大也 故能成大

・訓読：

道は漸（おお）いかな。其れ左右する可きなり。功を成し事を遂げて、而して名有りとせず。萬物之に歸するも、而して主と爲らざれば、則ち常に欲無し。小と名づくる可し。萬物之に歸するも、而して主と爲らざれば、大と名づくる可し。ここをもって、聲「人の能く大なるを成すは、その大なるを爲さざるを以てなり。故によく大なるを成す。」

・現代訳：

道は、あまねく広く行きわたる。

それはどちらにも偏らず自在である。

功を成し事を遂げても、

それを自らの功として名づけない。

万物はみなそこへ帰してくるが、

それでも主として君臨しようとしてしない。

だからこそ、常に欲がないと言える。

そのあり方は「小」と名づけることができる。

また、万物はみなそこへ帰してくるが、

それでも主として君臨しない。

その働きは「大」と名づけることができる。

これゆえに、聲「人が大いなることを成し遂げられるのは、

大いなることを為そうとしないからである。

だからこそ、大いなることを成し遂げられる。」